

論文審査の結果の要旨

沖本幸子

沖本幸子氏の博士論文「今様の時代——変容する宮廷芸能」は、12C後半、後白河院によって『梁塵秘抄』というテキストに結実した「今様」という歌謡をめぐる芸能史的考察である。

この論文は、三部構成となっており、第一部「今様、宮廷へ」では、後白河院以前の、プレ今様の段階が捉えられ、第二部「祈りの今様」では、後白河院の今様狂いの様相が語られ、第三部「歌から舞へ」では、後白河院の時代以後の、今様を含めた芸能の諸相が問題となっている。

第一部では、今様が宮廷に流入してきた様相が捉えられる。今様が「今様歌」つまり単に「今風の歌」と呼ばれた時代から、「今様」という歌謡の一ジャンルとして認識されるに至るプロセスが追われ、また、宮廷の儀式的酒宴である「淵酔」において、今様が、滑稽なパフォーマンスである「散楽」と重なり合いながら入り込み、重要な位置を占めるまでが追跡されている。今様歌から今様へという捉え方、散楽と重なり合う今様という指摘に独創性が認められる。

さらに沖本氏は、プレ今様の場を形成した人に注目し、白河院の皇女郁芳門院やその妹令子内親王のサロン、撰閲家では藤原忠実の今様活動、そして、白河院の北面の武士の男性的な場での今様芸の展開にも触れている。どれも先行研究を一步步つ進めるものだが、とくに藤原忠実の今様との関わりについては、今までにない研究と評価された。

第二部では、後白河院の今様への傾倒を熊野信仰の面から捉えようとしており、その上に立って、今様中の秘曲とされる「足柄」について、主として民俗学的なアプローチによって新しく考え直したのが第一章である。第二章の「今様の身体」では、後白河院が持っていた声の力への信仰ならびに、当時理想とされた声のあり方への追究がなされている。ここでは、今様を謡う後白河院の身体をどのように捉えるのか、という身体論的アプローチがなされており、第一部、第三部の歴史的アプローチと、第二部の民俗学的・身体論的アプローチとが、齟齬をきたしているという批判もあったが、逆に身体論的アプローチの独創性を高く評価する立場や方法論の豊かさを評価する立場の表明もなされた。

第三部では、今様という芸能自体は衰退していくものの、今様が宮廷の中核に入ったことにより、その散楽的なエネルギーが宮廷芸能にさまざまな影響を与え、むしろより大きな波動となって受け継がれていくことが、いくつかの局面で明らかにされた。

「乱拍子」「白拍子」などの新しいリズムの流行、「淵酔」の場における歌から舞への力点の移行、その舞において「物云舞」という独自の芸能が生み出され、それが中世小歌の先駆けとなっていくこと、さらに「五節の櫛」の風流化（装飾化）の問題、そして最後に、天皇の警護を職務とした滝口の武士が、乱拍子を歌うプロとなり、猿楽能成立の母体となる寺院儀礼の場に参加するなど、芸能者としての側面を強めていったことなどが語られた。

滝口の武士の芸能についての総合的記述はこの論文においてはじめてなされた独創的研究であり、能楽の形成史にとっても大変重要な成果であることは疑いのないところである。

資料の取り扱い方の未熟な面への指摘、宮中の他の歌謡である「朗詠」や「催馬楽」などの音楽的側面を徹底的に解明することにより「今様」の独自の位相がよりはっきりするだろうといったアドヴァイスもなされたものの、本論文が全体として、先駆的、独創的な研究となっていることについては審査員全員の間で意見の一致を見た。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。